



「第二次日本経穴委員会」便り

～第46回 経穴部位標準化の意味とその後の広がり～

第二次日本経穴委員会委員長 かた いしゅういち
形井秀一

NHK報道番組からの取材

例年になく早い桜の時期となった3月下旬、研究室へ電話があった。

「数年前に、ツボが標準化されたということですが、それは、その後、世界に広がっているのでしょうか」と尋ねられた。「2006年に合意されたツボの標準化作業は、2008年5月に発刊予定の英語公式版で1つの区切りになります。これを機に、世界に大きく広がると思います」と私は答えた。電話の相手は、さらに、番組で「ツボ特集」をしたいので、ツボの世界への広がり具体的なイメージできるイベントやツボに関係した催し物はないかと尋ねるので、予定されていた5月3・4日の私のアメリカでの講義と実習「日本の鍼灸」と、5月30日の京都国際会議場での英語公式版発刊記念講演会および全日本鍼灸学会京都大会を紹介した。

電話はNHK BS1の「きょうの世界」という報道番組のディレクターからであった。後に、メインキャスターの丁野奈都子氏から、ツボがつくば会議で標準化された時から注目していたと聞いた。そのツボの特集（6月2日に放送済）は、つくば会議での決定、WHO英語公式版の発行、京都での記念講演会、そして、日本の鍼灸・

手技療法が今アメリカへ受け入れられつつある現状を取材し、ツボの現在と世界への広がりを報道する簡潔な15分間番組にまとめられていた。

ツボの特集番組がNHKの報道部のような「かちっとした」部署で取りあげられたことは大きな意味があると思うが、1年以上も前の決定を気につけ、番組を組む機会を考えていたことが私には驚きであった。また、つくば会議時点のホットなニュースの扱いよりも、1年半後の経過を伝えようとする報道姿勢がすばらしいし、うれしかった。ツボの標準化は、「世界の今」を報道する立場からも特集に値するものだったのだと、改めて標準化達成の意味を考えた。

標準部位普及の道のり

①世界への普及

標準化されたツボの普及は、簡単ではない。まず、内容の公表が必要であるが、WHO/WPRO（以下、WHO）が2008年5月に英語公式版を発刊し、その関門は開かれた。

決定から1年半を要した最大の理由は、部位をわかりやすく伝えるためにツボごとに図を付けたことだった。英語公式版の図は、第二次日本経穴委員会（以下、経穴委員会）がWHOと検討をし、依頼を受けて作成した。そのため、

経穴委員会の2007年度の活動は図の作成に忙殺されてしまった。経穴委員会は医道の日本社と共同で作業を進めた。361穴に一図ずつ作成したが、おそらく一図平均7回以上書き直したに違いない。2500枚以上の図と格闘した。

部位は解剖学的に正確に表記することを目指したので、図の作成は現代解剖学と矛盾ないようにと、本文以上に大変な作業であった。

それでも、WHOの決定事項の出版には、数年かかるという通説からすると、かなり早い。

ところで、経穴委員会は、日本のすべての鍼灸の教育機関約150校に1冊ずつ英語版を進呈した。WHOは、「標準部位の普及に努力すること」をつくば会議で各国に要請したので、それを実行した形である。世界の鍼灸関係者がこれから各国で普及活動を行うことであろう。

②日本国内での普及

日本語版の出版は、秋に予定されている。その後には、経穴のチャート図や経穴人形などの作成、既出版物の書き直しも行われるだろう。それらの経済的効果も見込まれる。

ところで、経穴部位が変更になった場合でも、各臨床家はこれまでの部位を使い続けるだろうし、それでよいと思う。それは、今回の標準化は、日中韓でこれまで使用されていた部位の間違いを訂正し、一本化するためのものではないからだ。鍼灸を医療として運用してきた長い歴史のある3カ国で行われてきた部位を尊重しつつも、異なる部位が使用されることは、世界的な普及や制度化などに支障があるから、である。

③教科書の改訂

さて、標準化した部位を学校教育の段階から教えることは、最も緩やかで現実的な普及活動であろう。

実は、東洋療法学校協会と日本理療科教員連

盟で作る教科書編纂委員会に経穴委員会が協力し、1年前から教科書改訂のために会合を重ねている。順当に行けば、2009年4月の入学生は標準部位で学び、その学生が卒業する2012年春の国家試験から標準部位の試験内容となるであろう。だが、国家試験委員会がどうするかは、私が判断できる範囲を超えている。

④標準化普及の現状と今後の広がり

ところで、現在、様々な標準化が鍼灸・手技の分野で進んでいる。例えば、日本では2004年に鍼のJIS (Japanese Industrial Standards) 規格を決め、それに従って鍼が製造されている。これは、世界で一番厳しい鍼製作基準であるが、2007年には、韓国のKIOM (Korea Institute of Oriental Medicine) の音頭で、ISO (International Standardization for Organization) 規格を承認してもらうための申請原案作りの検討がアジアから5カ国が集まって始まった。

また、WHOは世界の手技療法のガイドライン作りを進めており、日本もマニュアルセラピーガイドライン (MTG) 作成委員会を結成して作成を進め、WHOで決定する形にできればと考えている。漢方関係では、2007年夏、WHOから4700語余りの標準用語集が出版され、東洋医学が学びやすく、研究しやすくなった。

このように、鍼灸、漢方、手技の分野で、WHO主導で国際標準化が行われている。21世紀初頭のこれらの標準化は、今後の東洋医学の世界的な発展の基礎となるものと位置づけられる。21世紀の人類の健康を考えると、いささか遅きに失した観はあるが、この時点で東洋医学が世界の医学、医療、健康分野に参入し、その発展に貢献することは、人類史上意義があると思う。その意義の大きさは、これからの時代が評価することになるであろう。